

論文

1842年ガージャール朝使節団のヒヴァ派遣
 ——シーア派捕虜解放問題と英露両国の関与について——

塩谷 哲史

**Qajar Mission to Khiva in 1842:
 Negotiations Over Release of Shiite Captives and the Participation of
 Anglo-Russian Representatives**

SHIOYA Akifumi

Abstract

Muhammad Ali Khan was joined by British and Russian representatives on his 1842 mission to Khiva. This instance has been overlooked in both the context of the historical relationship between Iran and Central Asia and research covering the Great Game of the nineteenth century. This article discusses the importance of the Qajar mission for both Khivan-Iranian and Anglo-Russian relations in Central Asia. The author argues that negotiations for the release of Shiite captives detained in Khiva repeatedly failed because the Qajarid and Qongrat had limited state control over Turkmen military raids (*ālāmān*). On the other hand, the British government overlooked these limitations and mediated in the negotiations to prevent Muhammad Shah's projected military expedition against Khiva. This was an attempt to eliminate factors that would worsen the instability of the British Indian Army's occupation of Afghanistan. Abolitionist logic was reflected in the British side of the negotiations by regarding Shiite captives in Khiva as slaves. The Russian government pursued policies in line with the Concert of Europe by placing special emphasis on cooperation with Britain while also facing commercial competition in Central Asia. On one hand, this required a cooperative attitude toward the mission. On the other hand, Russia made great efforts to complete a commercial treaty with Khiva to cultivate markets for Russian industrial goods. The dilemma of pursuing Concert policies in Europe while competing against Britain in the Asian market clearly affected the decision-making process regarding Imperial Russia's Central Asian policies of the 1840s.

Keywords

Shiite Captives, Turkmen Military Raids (*ālāmān*), Qajar Rule in Khorasan,
 Anglo-Russian Relations in Central Asia

はじめに

19世紀のイランと中央アジアとの関係史において、ホラーサーンからマーワラーアンナフル、ホラズムなど中央アジア南部のオアシス諸地域に連行されたシーア派イラン系の捕虜 *asīr* の存在が注目されてきた¹。18世紀後半から19世紀初頭にかけての中央アジア南部では、マーワラーアンナフルにブハラを中心とするマンギト朝（1756–1920年）、ホラズムにヒヴァを中心とするコングラト朝（1804–1920年）のように、ウズベク諸部族出身の有力者たちが新たな政権を樹立した。これらの政権は、国内の農業生産の拡大、ロシア、カザフ草原、インド、東トルキスタンを結ぶ国際交易で生み出された富を背景に、都市民の支持を受けて集権的な体制を構築するとともに、オアシス地域外に広がる草原や砂漠地帯へその影響力を拡大させていった（塩谷 2014: 65）。同時に、これらの政権はシーア派を異端視するスンナ派の政権であり、理念上スンナ派世界と、イランの領域にほぼ重なるシーア派世界を区別し、イランを聖戦の対象地とみなす政治的主張を繰り返した（木村 2008: 59）。一方、18世紀中葉までにカスピ海東岸からコペト山脈北麓へと波状的に移動・定着していった遊牧トルクメン諸部族は、彼らが定期的に行う遠征行 *ālāmān*² を通じて、ホラーサーンに居住するシーア派イラン系の定住民を捕虜としていた。トルクメンは、マンギト朝、コングラト朝の政治的主張を根拠に、実質的には自分たちの利益行為としてシーア派定住民を捕虜とし、ブハラ、ヒヴァに奴隷として売り渡す慣行を続けた（木村 2008: 59–60）。19世紀にブハラ、ヒヴァを訪れた西欧、ロシアからの旅行者たちは、こうした捕虜となり奴隷化されたシーア派定住民について言及している³。

*本論では、ヒジュラ暦はグレゴリウス暦と併記し、ユリウス暦を用いた場合には、年月日の直後に「(ユリウス暦)」と併記した。19世紀において、ユリウス暦はグレゴリウス暦より12日遅れであった。

1 木村（2008）は、4世紀から19世紀に至る中央アジア、イランの人々の相互の地域認識とその変遷を議論している。本論のイラン、中央アジアという地域名称の使用もこの議論を踏まえている。

2 遠征行については、第3章第1節で詳述する。

3 最も代表的な旅行者の記述は、Vámbéry（1868: 205–230）を参照。ヴァーンベリは、クル *qūl*、ハーナザード *khānazād*、ドグマ *dūghma* と呼ばれた隷属身分の人々を「奴隷 *slave*」と見なしている（Vámbéry 1868: 225–226）。こうした旅行者たちが「奴隷 *slave*」と見なした人々の取引、奴隷化の過程、彼らの現地社会での地位については不明点が多い。Eden（2017）は、19世紀の中央アジア諸都市の後背部にあたる草原や隊商宿網における広範な「奴隷」取引の存在を指摘した。またガージャール朝期のイランにおける奴隷貿易のあり方、奴隷たちの社会的地位、そして奴隷制廃止に至る道程について包括的に論じた Mirzai（2017）と、トルクメンのシーア派定住民に対する襲撃、捕虜の獲得、奴隷化に至る過程を概観した Zargarīnzhād and ‘Alīpūr（2009）は、おもに旅行者の記述にもとづき、イラン北東部におけるトルクメンの「奴隷貿易」とそれに対する報復の連鎖を描き出した。しかしこれらの研究は、中央アジアの現地政権・社会が、誰を奴隷に相当する身分と見なしたのか、またシーア派定住民の捕虜たちがどのような過程を経てそうした身分になったのかという問題を解明できていない。クル、ハーナザード、ドグマといった身分に属した人々は、19世紀ヒヴァ・ハン国

一方1796年ガージャール朝を創始したアーガー・ムハンマド・ハーン（在位1796–1797年）は、当初からイランの再統一に邁進し、マシュハドのみならずバルフ、メルヴ、ヘラートを含む歴史的ホラーサーンをもイランの「内地」と見なした。そして1832年までにガージャール朝はマシュハドを中心としたホラーサーン⁴の統治を確立したが、その後も「失地」と見なしたメルヴ、ヘラートの回復を目指す領土主張を繰り返した（小牧 1992: 30–31; 木村 2008: 58–59）。この過程でガージャール朝は、マンギト朝、コングラト朝との間で、シーア派の捕虜返還を求める交渉を行った。その代表例として、1844年アッバース・クリー・ハーン ‘Abbās Qulī Khān のブハラ派遣、および1842年ムハンマド・アリー・ハーン Muḥammad ‘Alī Khān Ghafūr, 1851年リザー・クリー・ハーン Rizā Qulī Khān Hidāyat それぞれのヒヴァ派遣が知られている⁵。

しかし19世紀前半から中葉にかけてのイランと中央アジアの関係史に関する研究は、同時期に中央アジアを含むユーラシア規模で繰り返されるようになった英露両国のグレートゲームに関する研究と接点を持ってこなかった。そこで本論は、1842年2月から6月にかけて、ガージャール朝のムハンマド・シャー（在位1834–1848年）が、シーア派捕虜解放を求めてコングラト朝のアッラークリ・ハン（在位1825–1842年）のもとに派遣したムハンマド・アリー・ハーンを全権とする使節団の交渉過程に注目する。この使節団には上述の交渉の中で唯一、英露両国の代表が同行した。しかし従来の研究では、コングラト朝とガージャール朝との関係史の文脈で本使節団を取り上げた Allaeva（2014）が、使節団の応接、儀礼、日当の支給、交渉方法を、他のガージャール朝からの使節団の事例と比較しながら検討したのみで、交渉の内容とその背景、および英露両国の代表の役割について述べていない。またグレートゲームの文脈で、ヒヴァにおいて奴隷化されたロシア人捕虜やシーア派イラン系の捕虜の問題がしばしば取り上げられてきたが、本使節団を取り上げた研究はない⁶。さらに宇山（2016: 122–123）が指摘するように、グレートゲームの観点からの研究においては、帝国間・大国間のゲームに関心が集中し、現地政権・集団側の動機や背景が詳しく分析されることは少ない。本論では、現地政権（コングラト朝とガージャール朝）間の交渉史の文脈から、

で作成された売買文書、財産分割文書、これらの身分からの解放に関する文書に登場する（Urunbaev 2001: 79–80, 161–163, 176, 183, 193–194, 385）。19世紀ホラズム社会の文脈におけるシーア派定住民の捕虜の奴隷化と、近代的な奴隷概念の形成、伝播との相関関係については別稿で論じたい。

4 ここでは、ほぼ現在のイラン・イスラーム共和国のホラーサーン3州およびゴレスタン州に相当する領域を指す。

5 19世紀前半のマンギト朝、コングラト朝とガージャール朝との関係については、Mannanov（1963）、Amanat（1990）を参照。またアッバース・クリー・ハーンのブハラ派遣については Noelle-Karimi（2012）、リザー・クリー・ハーンのヒヴァ派遣については、Granmayeh（1996）、Mannonov（1997）を参照。守川（2001）が、中央アジアに派遣された使節の記録を含む、ガージャール朝期の旅行記史料に関して包括的な紹介をしている。

6 グレートゲームの観点からの研究は、Khalfin（1974）、Ingle（1976）、Yapp（1980）など多数を挙げることができる。また最新の研究として Morrison（2013）は、第一次イギリス＝アフガン戦争（1839–1842年）、ロシアのヒヴァ遠征（1839–1840年）の時期の、英露両国の対中央アジア政策の共通点を実証的に解明しようとしているが、コングラト朝とガージャール朝との関係については触れていない。

ムハンマド・アリー・ハーン使節団の交渉が失敗に終わった背景を検討し、また中央アジアにおける英露関係の文脈から、両国代表がなぜ同使節団の交渉に加わったのかを明らかにしたい。まず第1章では、1842年のムハンマド・アリー・ハーン使節団の派遣に至る19世紀前半のコングラト朝とガージャール朝との関係史を整理する。第2章では、ムハンマド・アリー・ハーン使節団の交渉内容を詳述し、第3章ではコングラト朝＝ガージャール朝間のシリア派捕虜解放交渉の失敗の背景を考察する。そして第4章ではイギリス、第5章ではロシアそれぞれの代表が、同使節団に加わった意図を明らかにする。

ガージャール朝側の中心史料は、ムハンマド・アリー・ハーンが使節報告として記した『日誌 *Rūznāma*』である (Muhammad 'Alī Khān 1994)。またイギリス側については、ムハンマド・アリー・ハーンに同行した在テヘラン・イギリス公使館勤務のトムソン Taylor Thomson が、彼を派遣した同公使 minister マクニール John McNeill (在任 1836-1842年) に送った報告書とその同封文書が中心史料となる⁷。さらにロシア側については、公刊されたロシアの対中央アジア政策関係文書集を用いる⁸。ヒヴァ側に関しては、年代記 (Muhammad Rizā Mirāb) は同使節団の交渉に触れておらず、ヒヴァ・ハン文書中にも関連する文書は見つかっていない⁹。そのため、ヒヴァ側の交渉姿勢については、ガージャール朝側、イギリス側の史料の記述に依拠せざるをえない。

I. 19世紀前半のコングラト朝とガージャール朝との関係

1. コングラト朝、ガージャール朝のホラーサーン進出

コングラト朝とガージャール朝の関係は、コングラト朝のムハンマド・ラヒーム・ハン (在位 1806-1825年) が、ホラズム・オアシスの統一 (1811年) 直後に行った、1813年、1816年、1818

7 FO 60/89, No 24, Lieutenant Colonel Justin Sheil, May-July 1842 には、全 27 通の報告書、書簡の写しならびにそれらの一部の英訳が同封されている。その中には、ムハンマド・アリー・ハーンとコングラト朝の宰相 mihtar であったムハンマド・ヤークーブ・メフタルとの間の往復書簡の翻訳が 10 通 (Enclosure No 17-26) 含まれており、そのうち 8 通の原文 (ペルシア語) はムハンマド・アリー・ハーンの『日誌』にも収載されている (Muhammad 'Alī Khān 1994: 40-43)。

8 Serebrennikov 1912-1914。本文書集には、現在はロシア帝国軍事史文書館 (RGVIA)、ロシア帝国対外政策文書館 (AVPRI) などに所蔵されている、1841年、1842年の2度にわたりロシアからヒヴァに派遣された使節団の訓令や報告書が収載され、ムハンマド・アリー・ハーン使節団への言及もある。ただし、ロシア外相ネッセルローデ K. V. Nessel'rode (在任 1822-1856年) と在テヘラン・ロシア全権公使 minister であったメデム A. I. Medem (在任 1841-1845年) との間の往復書簡や報告書は公刊されていない。本論ではイギリス側の文書に含まれるそれらの一部のフランス語訳を参照できたに過ぎない。今後ロシア帝国対外政策文書館での関連文書の検討が必要である。

9 ヒヴァ・ハン文書とは、1873年ロシア軍のヒヴァ占領に際して、ハンの宮廷から接收され、1962年に現在のウズベキスタン共和国中央国立文書館へと移管された、約 3300 点の文書を指す。本文書群については、Bregel' (1966: 70) を参照。

年の3回にわたるホラーサーンへの遠征に始まる。当時のホラーサーンでは、マシュハドに長官 vāli が任命されていたものの、ガージャール朝の統治は確立していなかった。そしてムハンマド・ラヒーム・ハンは、ホラーサーン長官と対立する諸侯との同盟関係を構築しながら、コペト・ダグ北麓一帯に進出し、この地域に居住していたトルクメン・テッケ族の大部分を服従させることに成功した。1822年には、サロル、サルク、テッケからなるメルヴのトルクメン諸部族が、ムハンマド・ラヒーム・ハンに臣従を表明した。ムハンマド・ラヒーム・ハンの後継者アッラークリ・ハンは、1826年、1829年、1830年、1832年の4回にわたりホラーサーン遠征を行ったが、これらもガージャール朝のホラーサーン長官とホラーサーンの諸侯との対立に乗じたものであった。また1825年、アッラークリ・ハンの弟ラフマーンクリ・トラはメルヴを経由してサラフスまで進軍し、この地のサロル、サルク、テッケの諸部族から初めて徴税を行ったという (Muhammad Rizā Mirāb: 557b-558a)。しかし、ガージャール朝のファトフ・アリー・シャー (在位 1804-1832年) の皇太子アッパース・ミールザーによる1831-1832年と1832-1833年の2回にわたる遠征の結果、ホラーサーンにおけるガージャール朝の支配が確立した (小牧 1992: 30-31)。これ以降、コングラト朝のハンが指揮するホラーサーン遠征は1836年を除くと中断され、それが再開するのはムハンマド・アミン・ハンの治世 (在位 1846-1855年) に入ってから1846年であった。

すでに18世紀中葉以降のホラーサーンでは、トルクメンの遠征行とそれに対する応酬によって、トルクメン、シリア派イラン系住民の双方で捕虜が発生していた。そしてコングラト朝、ガージャール朝の支配がこの地域に確立していくと、両者間でこうした捕虜の解放交渉が行われるようになった。ガージャール朝の年代記に初めてこうした交渉の記録が現れるのは、1246/1830-31年のことである。このときトルクメン・テッケ族 2000 人が、マシュハドのエマーム・レザー廟への巡礼者 500 人を捕虜にした。ガージャール朝側はトルクメンに対する懲罰遠征を行うとともに、クルド諸侯の一人でハブーシャーンのリザー・クリー・ハーンに1万トマンを与えて、捕虜が連行されたヒヴァから彼らを買戻すよう命じた。リザー・クリー・ハーンの使者は捕虜の買戻しに成功したが、10万トマン相当を強奪されたとされる (Rizā Qulī Khān 2002: 7940-7941)。しかしこの事件について、コングラト朝の年代記には記述がない。さらにアッパース・ミールザーは、第2回のホラーサーンへの遠征に際してサラフスまで進軍し、この地のトルクメン諸部族 (サロル、サルク、テッケ) から多数の捕虜を得た。これに対し、サラフスのトルクメンはアッラークリ・ハンを通じて捕虜の返還を求めた。アッパース・ミールザーは、ヒヴァ・ハンおよびサラフス、メルヴのトルクメンが、今後ホラーサーンを侵略しないこと、ホラーサーンの商人たちの安全を保障すること、捕虜の取引を禁止することなどを条件に自身の側にいた捕虜の解放に応じた (小牧 1992: 31)¹⁰。

10 1842年の交渉に際して、アッラークリ・ハンはムハンマド・アリー・ハーンに対して、自分たちがこのときアッパース・ミールザーに7万トマンを支払い、捕虜を買戻したのだと主張している (FO 60/89, No 24, Enclosure 23, Muhammad 'Alī Khān to [Muhammad Ya'qūb] Mehtar, Khiva, No Date)。

2. シーア派捕虜解放交渉の開始

ガージャール朝では、アッパース・ミールザー(1833年10月20日)、ファトフ・アリー・シャー(1834年10月23日)が相次いで没したのち、後継者争いに勝利したムハンマド・シャーが即位した(小牧1992: 31)。コングラト朝とガージャール朝の宮廷間で相互の継続的な使節の交換による捕虜解放交渉が行われるようになったのは、このムハンマド・シャーの治世からである。1837-1838年にムハンマド・シャーは、歴史的ホラーサーンへの領土主張にもとづきヘラートへの遠征を行い、この都市を包囲した。アッラークリ・ハンはこの包囲中の1253年ズールカアダ月17日/1838年2月12日から1254年ラマザン月5日/1838年11月22日にかけて、ヘラート救援を名目として宰相ムハンマド・ユースフ率いる遠征軍をメルヴに派遣し、ヘラート政権やアフガン・トルキスタンの諸都市と同盟してガージャール朝の進出に対抗しようとした(Muhammad Rizā Mīrāb: 716b-728b)。ヘラート包囲はイギリスの干渉を受けて、1838年6月ガージャール朝軍が撤退を開始し失敗に終わった(小牧2006: 84)。その直後ムハンマド・シャーはヒヴァに使者ハーディー・ハンを派遣した(Muhammad Rizā Mīrāb: 690a-b)。ガージャール朝とコングラト朝双方の年代記から、このとき以降相互の使節交換が継続的に行われていたことが確認できる(Muhammad Rizā Mīrāb: 729b, 734a)。

そして1255年ラマザン月末/1839年11-12月に、ムハンマド・シャーの使者ミールザー・リザーがヒヴァに到着すると、アッラークリ・ハンはトルクメンに対して遠征行を禁止する勅令 *farmān* を発した(Muhammad Rizā Mīrāb: 730a-b)。しかし1256年シャーバーン月26日/1840年10月23日、テヘランからヒヴァの使者アタ・ニヤーズ・マフラムが、ガージャール朝の使者シャフサヴァール・ベクを伴って帰還すると、アッラークリ・ハンはトルクメンに対する遠征行禁止の勅令を撤回した。コングラト朝の年代記はその理由を、ガージャール朝のホラーサーン長官であったアッラーヤール・ハーン・アーサフダウラ(在任1834-1847年)の一族がヒヴァの臣民 *fuqarā* であったアハルのトルクメン・テッケ族に対する攻撃を行ったことに帰している(Muhammad Rizā Mīrāb: 736b-737a)。そして、1257年シャーバーン月12日/1841年9月28日には、メルヴのトルクメン・サルク族の行った遠征行により、アッラーヤール・ハーン・アーサフダウラの甥ムハンマド・ヴァリー・ハーンがマシュハド近郊で捕虜となり、その後ヒヴァに送られる事件が発生した(Muhammad Rizā Mīrāb: 741a; I'timād al-saltāna 1984-1985: 1656-1657)。これに対して1841年12月、ムハンマド・シャーはヒヴァに対する親征の準備を開始した(FO 248/102, No. 58, McNeill to Aberdeen, 31 December 1841; I'timād al-saltāna 1984-1985: 1657)。

このように、コングラト朝は1813年にコペト・ダグ北麓に進出を開始し、この地域のトルクメン・テッケ族を服従させ、1822年までにブハラとマシュハドを結ぶ交通の要衝であったメルヴ・オアシスにも進出し、さらにホラーサーンの諸侯と同盟して、ガージャール朝のホラーサーンにおける支配確立の試みに抵抗した。1830年代初頭にかけて、ガージャール朝の支配が確立に向かうと、トルクメンの遠征行とそれに対するガージャール朝側の懲罰遠征によって発生した捕虜解放をめぐる交渉が、コングラト朝とガージャール朝の間で開始された。さらに1837-38年のヘラート包囲後、

こうした交渉は、両者の宮廷間で直接行われるようになった。その結果1839年末、コングラト朝のアッラークリ・ハンは、トルクメンの遠征行を禁止する勅令を発したが、それは1年経たずに撤回された。そして1841年9月のムハンマド・ヴァリー・ハーンの虜囚事件を契機に、同年末にはガージャール朝がヒヴァへの軍事遠征を計画するに至った。

II. ムハンマド・アリー・ハーン使節団の捕虜解放交渉

ムハンマド・シャーのヒヴァ遠征計画を受けて、1842年1月8日テヘランでガージャール朝の大宰相ミールザー・アーガースィー *Hājji Mīrzā 'Abbās Āghāsī Īrāvānī* (在任1835-1848年)、外相ミールザー・アブルハサン・ハーン *Mīrzā Abū 'l-Ḥasan Khān Īlchī* (在任1838-1845年)、マクニールとの三者会談が行われた。この会談において、遠征を実行に移す前に、ヒヴァに使節団を派遣し、シーア派捕虜解放をめぐる最終交渉を行うこと、イギリス代表が使節団に加わり、交渉の仲介者 *mediator* となることが決定された(L/PS/9/121, pp. 41-48, Memorandum, 8 January 1842)。その後ロシア公使メデムもこの交渉に協力を表明し、当時ロシアの常駐代表としてヒヴァに滞在していたはずのニキフォロフ P. Nikiforov にも協力を求めることになった(L/PS/9/121, pp. 59-66, McNeill to Aberdeen, 25 January 1842; Serebrennikov 1912-1914: IV, 40-42)¹¹。

1257年ズールヒジヤ月27日/1842年2月9日、ムハンマド・アリー・ハーン率いる使節団は、テヘランに滞在していたヒヴァからの使者、ロシア公使館のムハンマド・ハサン・ベク、イギリス代表トムソンらとともにテヘランを出発した(Muhammad 'Alī Khān 1994: 3)。以下、ムハンマド・アリー・ハーンの日誌およびイギリス側文書をもとに、同使節団の行動と交渉過程を追っていき。彼らはマシュハド、サラフス、メルヴを経由して、1842年4月14日ヒヴァ近郊のベシュアルクに到着した。同日夜彼らは、ハザラスブ近郊の水路の浚渫の指揮に向かう途中でアッラークリ・ハーンと最初の会談を行った。まずトムソンが謁見し、マクニールからアッラークリ・ハーンに宛てた書簡を渡した。このときハーンは、アフガニスタンでの英印軍の苦境、アヘン戦争でのイギリスの勝利、ブハラで行方不明となったイギリス軍人の消息について尋ねた。トムソンは、アフガニスタンにおける最近の惨事¹²の噂を否定し、英印軍のアフガニスタンへの増派の可能性、イギリスの中国での成功について述べ¹³、ブハラのイギリス軍人は依然として消息不明であると回答した。その後、ムハンマド・アリー・ハーンが謁見を行った。彼は両国の友好を求めるが、夜遅いために国家間の交渉 *shūbat-i dawlatī* は次の機会にしたいと述べて退出した。翌4月15日にアッラークリ・ハーンはトムソンと会談を行ったが、ハーンはイギリスの商品や工業製品に関して質問をただけだった。4月17日にムハンマド・アリー・ハーン、トムソンらはヒヴァに到着し、イチャン・カラ近

11 しかし第5章第1節で述べるように、このときすでにニキフォロフはヒヴァを退去していた。

12 おそらく1842年4月5日のカーブル近郊でのシャー・シュジャー殺害事件を指す。

13 第一次アヘン戦争(1840-1842年)におけるイギリスの戦勝を指している。

郊のアンガリークのバグに宿舎をあてがわれた (Muhammad 'Alī Khān 1994: 12-13; FO 60/89, No 24, Enclosure 1, Thomson to McNeill, Uzz, 15 April 1842)。

4月23日アッラークリ・ハンがヒヴァに帰還すると、4月25日夜に再び会談が行われた。トムソンは、ムハンマド・シャーがヒヴァ遠征を計画しており、イギリス政府がコングラト朝、ガージャール朝間の交渉の仲介を申し出て、それが受け入れられたために自分が派遣されてきたと述べた。さらに「[ロシアとの] 敵対が続いていたときの最近の同様な例に際しては、イギリス政府代表 agent による提案をハンが受諾し、それによりハンが多くの利益を得た」とつけ加えた。ここにある「最近の同様な例」とは、第4章第2節で述べる、英印軍将校シェークスピア Richmond Shakespear の仲介によるロシア人捕虜解放の成功を指している。これに対しアッラークリ・ハンは、今回の捕虜解放と、以前のロシア人捕虜解放とは事情が異なるとし、「私がロシア人捕虜を手放す交渉を行った時は、私たちの商人と商品がロシア人に差し押さえられていた。彼らを解放するため、私は要求されたことに同意した」と回答した。トムソンは、イランとホラズムとの間の戦争は相互に利益を生み、ムハンマド・シャーが「二列強 two greatest powers であるイギリス、ロシア両国政府の友好的な提案」を尊重したうえで使節を派遣しており、ハンもそのことを尊重すべきだと主張した。また対立の原因をガージャール朝側の攻撃に帰するアッラークリ・ハンに対して、トムソンは攻撃がどちらから始まったかの議論は不毛であり、またムハンマド・シャーは軍備増強に意を注ぎ、ヒヴァ遠征を実施するつもりだと述べた。その後アッラークリ・ハンは、捕虜交換、ならびに同数以上の捕虜の扱いについては買戻しを原則とする提案を行った。ムハンマド・アリー・ハーンは、シャーは捕虜の交換、買戻しいずれにも応じないだろうと回答し、その日の会談は終わった (FO 60/89, No 24, Enclosure 2, Thomson to McNeill, Khiva, 26 April 1842) ¹⁴。

このち交渉は、ムハンマド・アリー・ハーン、トムソンとムハンマド・ヤークーブ・メフタルの間で続けられた。4月29日、ムハンマド・アリーはメフタル宛に書簡を送り、ヒヴァ側は帰還を望むイラン人捕虜を送還し、今後双方ともに攻撃を停止すべきであるというガージャール朝側の要求を伝えた (Muhammad 'Alī Khān 1994: 42; FO 60/89, No 24, Enclosure 22, Muhammad 'Alī Khān to [Muhammad Ya'qūb] Mehtar, Khiva, [29 April 1842])。同日のうちにメフタルとの会談が行われ、トムソンがメフタルにヒヴァ側からの提案を求めた。メフタルは、1839年11-12月のミールザー・リザーのヒヴァ派遣とアッラークリ・ハンの遠征行禁止命令以降に発生した捕虜を対象を限定して、捕虜交換をすべきという提案をした。これに対しトムソンは、まずヒヴァ側が一定数の捕虜を解放し、相互の攻撃を停止させ、その後ガージャール朝が同数の捕虜を解放し、かつこれまでの攻撃の補償はお互いに一切しないようにするという条件を提示した。この提案をムハンマド・アリー、メフタルの双方が同意した。メフタルはその一定数をムハンマド・アリーに問い、ムハンマド・アリーはその数を2000-3000人と述べた。メフタルは、それについてハンに報告し、裁可を待つと答えて、

14 ただし、ムハンマド・アリー・ハーンの『日誌』によると、彼がハンに初めて捕虜の解放を提案したのは、1257年ラビー1月9日/1842年4月30日のこととしている (Muhammad 'Alī Khān 1994: 18-20)。

この日の会談は終了した (Muhammad 'Alī Khān 1994: 21-22; FO 60/89, No 24, Enclosure 3, Thomson to McNeill, Khiva, 30 April 1842)。

その後おそらく5月12日ごろ、アッラークリ・ハンはムハンマド・アリーと捕虜になっていたムハンマド・ヴァリー・ハーンを会わせ、かつ後者を仲介者 kadkhudāyī としてムハンマド・アリー、トムソンと会談を持つとした。しかし会談に際して、アッラークリ・ハンは、自身で自由を購入し、帰国を希望する捕虜の解放を認める譲歩の姿勢を示したが、最終的には捕虜交換にのみ応じられると回答した。またイギリス人の仲介や、ゴルガーンに駐屯するガージャール朝軍の存在に不快感を表明した¹⁵。さらにムハンマド・アリーが、捕虜交換ではなく、一部でもよいのでヒヴァにいる捕虜を解放するよう要求したところで、会談は打ち切られた。そして5月13日、アッラークリ・ハンからメフタルを通じてムハンマド・アリーに、「もし捕虜交換 [という条件] を受諾しなければ、帰国許可を与える。もしペルシア [ガージャール朝] がこの決定に満足しないならば、武力に訴えてよい。ハンはそうした手段をとる用意ができています」という回答が届いた (Muhammad 'Alī Khān 1994: 23-27; FO 60/89, No 24, Enclosure 4, Thomson to McNeill, Khiva, 14 May 1842)。トムソンは、ここですでにアッラークリ・ハンの最終回答が出たとしているが、ムハンマド・アリーはその後さらに1回ハンと会談を持った。しかしその会談では、使節団にイギリス、ロシアからの代表が含まれていることに対して、ハンが再び不快感を表明しただけだった (Muhammad 'Alī Khān 1994: 29)。こうして、交渉は最終的に決裂し、5月23日夜ムハンマド・アリー・ハーン使節団はヒヴァを離れた。

このように、ガージャール朝側は限定された数であっても無条件の捕虜解放に固執したのに対し、コングラト朝側はそうした提案を受け入れず、捕虜交換ないし捕虜買戻しを主張し続けて、交渉は決裂した (Muhammad 'Alī Khān 1994: 40-41)。しかしその後、ガージャール朝のヒヴァ遠征は実行されなかった。イギリス側の文書によると、ガージャール朝宮廷がアフガニスタンに近い北東辺境での軍事行動に対するイギリス側からの懸念表明を尊重したこと、西部辺境でのオスマン帝国との間の緊張の高まりが理由として挙げられている (L/PS/9/122, pp. 183-188, Sheil to Aberdeen, 12 July 1842; pp. 511-512, Sheil to Aberdeen, 28 July 1842) ¹⁶。その後、コングラト朝とガージャール朝との間の使者の交換は中断したようだ。コングラト朝ではラヒームクリ・ハン (在位 1842-1846年) のうち、ムハンマド・アミン・ハン (在位 1846-1855年) が即位すると、再び両者間の交渉が始まった (Rizā Qulī Khān 2002: 8321, 8535-8536) ¹⁷。1851年にはガージャール朝のリザー・クリ・ハーン使節団がヒヴァに派遣され、シーア派捕虜解放交渉を行ったが失敗に終わった (Granmayeh 1996)。

15 1841年ゴルガーンで起きたハズラテ・イシャーン率いるトルクメンの反乱鎮圧のために派遣されたガージャール朝軍を指す。ガージャール朝年代記によると、同軍はムハンマド・アリー・ハーン使節団の交渉結果次第で、ヒヴァに進軍する予定であったという (I'timād al-saltāna 1984-1985: 1657)。

16 しかしこれらの理由については、ガージャール朝史料の記述との比較検討が必要である。

17 1849年5月から8月にかけてイギリス本国政府は、ロシアの中央アジアへの進出を調査するため、ヒヴァへの使節派遣を計画したが、実現しなかった (L/PS/3/28, pp. 311-312, Correspondence, Palmerstone to Foreign Office, 6 August 1849)。

そして1855年ムハンマド・アミン・ハンがサラフスで、トルクメン・テッケ族とガージャール朝の連合軍に敗れて戦死すると、コングラト朝はコペト・ダグ北麓およびメルヴへの影響力を喪失し、両者間の捕虜解放交渉は終わりを告げた。

Ⅲ. コングラト朝＝ガージャール朝間の捕虜解放交渉

以上、1842年に英露両国の代表が加わりヒヴァに派遣されたガージャール朝使節団の交渉内容を見てきた。本章では、コングラト朝＝ガージャール朝間の捕虜解放交渉の失敗の原因について考察したい。

まず、コングラト朝＝ガージャール朝間の交渉では、あくまで解放の対象は、トルクメンの遠征行およびそれに対する懲罰遠征で発生した捕虜であった¹⁸。そしてガージャール朝側は、ヒヴァにいるシーア派捕虜の無条件解放と、そうした捕虜の売買禁止を求めた。これに対してコングラト朝側は、ガージャール朝側にいる、おもにトルクメンからなる捕虜と、ヒヴァにいるシーア派捕虜との交換を原則とし、交換できる数を上回る捕虜に関しては、相互に買い戻すべきだと主張し続けた。コングラト朝が無条件の捕虜解放とその売買禁止を認めず、捕虜交換ないし捕虜買戻しを主張していた点は、1851年のリザー・クラー・ハーン使節団のヒヴァ派遣時の交渉（Rizā Qulī Khān 1975: 70-73）、および第4章第2節で述べる1840年のロシア人捕虜解放のときと同じであると言ってよい。

1. コングラト朝のトルクメンに対する統制

1830-1850年代のコングラト朝とガージャール朝との間の捕虜解放交渉が平行線をたどった背景には、捕虜を発生させるトルクメンの遠征行とそれに対する懲罰遠征を双方とも止めることができなかった事情があった。以下、その背景について考察していきたい。

1813年から始まったコングラト朝のハンたちが指揮するホラーサーン遠征は、イランのシーア派「異教徒」に対する聖戦として正当化されていた。そして遠征先では、戦利品として多数の捕虜が発生した。また1841年のジャムシード族の移住のように、遠征先の住民を集落や部族単位でホラズムに移住させた事例もあった（塩谷 2014: 72-75）¹⁹。捕虜の獲得や自発的、強制的な移住者の増

18 コングラト朝、ガージャール朝の年代記、およびムハンマド・アリー・ハーンの『日誌』の記述には、解放の対象としてあくまで捕虜 *asīr* しか現れない。

19 プハラのアミール、シャームラード（在位 1785-1800 年）は、1785 年メルヴを占領し、その住民（18,000 戸から 3 万戸ともいわれる）をプハラなどに強制移住させた。その後彼は、20 回以上にわたり、とくに収穫期の秋を中心に、シーア派「異教徒」に対する聖戦を標榜して、ホラーサーン方面への遠征を行ったとされる。こうした遠征は、ヒヴァ・ハンのホラーサーン遠征との共通点も多い。たとえば、①シーア派に対する聖戦、②イスラーム法に定められた戦利品の配分の実践（5 分の 1 が君主の取り分となる）、③服従を拒むシーア派住民の人身の捕縛・売買と財産の略奪・分配は、神と預言者の名のもとに正当化された点である（木村 2016: 68-69）。プハラにおいて強制移住の対象となった人々の、シーア派からスンナ派への「改宗」、

加は、19 世紀前半のヒヴァ・ハン国における灌漑地の拡大と、それにとまう灌漑作業や新灌漑地の開拓のための労働力の需要と無関係ではないだろう。実際に、労働力や軍事力をもたらす軍事遠征の拡大は、ハンが指揮する灌漑事業の拡大と相互に関連していた（塩谷 2014: 81）。

ただし、コングラト朝の宮廷が、捕虜の獲得、取引、転売の過程を統制できたわけではなかった。確かにコングラト朝の宮廷は、ホラーサーン遠征などを通して獲得した捕虜の取引に直接関与し、取引に際して徴税を行っていたことが知られている²⁰。しかし、Eden (2017) が明らかにしたように、捕虜の売買は、その中心とみなされてきた都市に加え、草原地帯や交易路上の隊商宿を拠点として広範囲で行われていた。そして、売買を通じて奴隷化された捕虜たちはそうした拠点を通じて、次々と転売されていた²¹。そのため、コングラト朝の宮廷が捕虜の行方を把握することは難しく、ガージャール朝が求めるような多数の捕虜解放要求に応じることはできなかった。

またガージャール朝と勢力圏が接するコペト・ダグ北麓やメルヴ、サラフスにおいて、コングラト朝宮廷から派遣された太守 *hākīm* が守備隊とともに駐屯したのはメルヴだけであった。またシルダリヤ沿岸に要塞を建設し、入植を進めていったコーカンド・ハン国と異なり、ホラズムの住民がそれらの地域に移住することもなかった（塩谷 2014: 101）。コングラト朝のこの地域の支配は、もっぱらハンやその一族、高官が指揮する定期的なホラーサーン遠征の実施によって保たれていた。

このホラーサーン遠征の経過をより詳細にたどってみたい。ハンが遠征の開始を布告すると、ウズベク、カラカルパク、トルクメンなどホラズム・オアシスとその周辺地域に居住する様々なエスニック集団が集結した。ホラーサーン遠征の場合、遠征軍の前衛と後衛はともにトルクメンに任された。こうしたトルクメンの大半は、ホラズムにアトルク *ātliq / ātligh* と呼ばれる土地を受領し、兵士たち自身もアトルクと呼ばれた。彼らは免税や灌漑作業の賦役の免除といった特権を受けるかわりに、自弁で馬と武器を用意し、遠征に参加した。19 世紀前半を通じて遠征軍の規模は拡大する傾向にあったが、その中でのトルクメンの兵士数は、数の上でも、また全軍に占める比率の上でも増大し続けた²²。遠征中にコングラト朝のハンたちは、メルヴ・オアシスやコペト・ダグ北麓のオアシス地域に本営を構えて滞陣し、そこからトルクメンに遠征行を行わせた²³。そしてハンは、遠征行で得られた戦利品の 5 分の 1 を受け取り、残りを遠征参加者の間で分配した。戦利品には捕

彼らのタキーヤ（信仰隠し）の実践、移住後の生業や社会内での地位については木村（2016）を参照。ただし、シャームラードの遠征とトルクメンの遠征行との関わりは今後の課題である。

20 19 世紀前半のコングラト朝宮廷の高官の一人で、捕虜から有能な者を宮廷奴隷に選抜していた、イラン系の出自を持つと考えられるホジャシュ・マフラムについては、塩谷（2014: 102）を参照。また 1873 年ロシアのヒヴァ遠征直後の聞き取り資料によると、宮廷は取引の対象となった男奴隷 *dūghma*、女奴隷 *chūrī* 1 人あたり、それぞれ 2 ティッラー、3-5 ティッラーを徴収した（AV IVRRAN: f. 33, op. 1, d. 13, l. 29ob.）。

21 インド洋の奴隷貿易においても、広範囲で転売が行われていた（Suzuki 2017: 73-96）。

22 プレーゲルは、上述したアトルクの制度が、もともとトルクメンのもので発達したものであり、それをコングラト朝のハンたちが取り入れた可能性がある」と指摘している（Bregel' 1961: 108-115）。

23 1821-1822 年にホラーサーンを旅行したフレイザーは、トルクメンの遠征行がサブザヴァールやニーシャーブルにまで及んでいたと述べている（Fraser 1825: 274-275）。

虜も含まれていた。コングラト朝の年代記によると、こうした滞陣中に、コングラト朝とガージャール朝の軍の主力同士が直接戦闘を行ったのは、1813年から1855年にかけて1度しかなく、他の遠征においてコングラト朝軍は、ホラーサーン北東部での滞陣と遠征行の実施、遠征先に居住する遊牧、半定住の集団からの徴税、周辺諸勢力との使者のやりとりのみで帰還している（Bregel' 1961: 180-182; 小前 2001: 59; 塩谷 2014: 79-80）²⁴。

19世紀に行われた114回の遠征行を分析したRosliakov（1955）によれば、トルクメンの遠征行の規模は、ロシア人の諸記録によれば150人以上、コングラト朝の年代記の記述によると25-500人であった。また遠征行の期間は、1回につき20-25日以下であった。その経過は次の通りである。指揮官sardārが攻撃の計画を知らせ、軍を召集した。行軍は小部隊ごとで、夜行shabgīrも行い、1昼夜で50-60キロ進んだ。攻撃目標に接近すると斥候を出し、その目標を特定した。こうした攻撃は、正規軍がいる場合には陽動作戦、夜襲、伏兵などの形態をとり、都市や集落で市の立つ日に合わせて行われた。正規軍に対抗できない時には、都市や集落の郊外の農民などを連れ去って捕虜にし、帰還したという²⁵。

ロスリャコフの分析の中で興味深いのは、114回の遠征行が実施される時期に、大きな季節的偏差はなく（春26回、夏27回、秋40回、冬21回）、夏に行われた27回のうち24回はコングラト朝のハンたちの軍事遠征の際に行われたという点である。なぜ夏に集中しているのかはさらなる考察が必要であるが、この指摘にもとづけば、恒常的に行われていた遠征行を、コングラト朝のハンたちがホラーサーン遠征の中に組みこんでいたと考えることができる。逆に言うと、ホラーサーン遠征のとき以外は、コングラト朝のハンがトルクメンの遠征行を統制することは難しかった。

2. ガージャール朝のトルクメンに対する統制

一方で、ガージャール朝宮廷は、コングラト朝に比してさらにトルクメンに対する統制力を持ちえなかった。シュナイダーの研究によれば、アーガー・ムハンマド・ハーンを輩出したガージャール族コユンル部は、もともとトルクメン・ヨムート族と同盟関係にあった。しかし、アーガー・ムハンマドがガージャール族を再編した1792年以降、両者は恒常的な敵対関係に陥った。その結果、トルクメン・ヨムート族はガージャール朝から独立を保ち、徴税や徴兵の対象にならなかった一方、アスタラーバードなどの都市との交易を続けることができ、定住農耕民から保証金sākhliを得ることができた。さらに1870年代以降ロシア帝国との国境が確立して以降でもなお、住民や家畜への襲撃によって収益を得ていたという。これに対してガージャール朝は、歩兵や優れた騎兵、税の供給源を失い、北東国境の安定を図れず、自らの領土と住民を守り、公正な統治を行うという統治者の責務を守ることで確立できる威信を獲得できなかった（Schneider 2003: 194-195）。

24 コングラト朝軍とガージャール朝軍との間のほぼ唯一の直接衝突は、1855年にサラフスで起き、コングラト朝軍を指揮していたムハンマド・アミン・ハンが戦死した（Wood 1998: 253-255）。

25 トルクメンの遠征行は、略奪行為、生産力の低い乾燥地域での不可欠な生業の一つ、民族解放闘争など、ソ連期から様々な評価を受けてきた。その研究史については、Botiakov（2002: 7-12）を参照。

またガージャール朝側の遠征行に対する懲罰遠征は非妥協的で、トルクメンの根強い反発を招いた²⁶。そうした懲罰遠征の際には、トルクメン側から連行された捕虜が発生した。トルクメンがそうした捕虜の送還のために身代金を支払ったのに対し、ガージャール朝領内の住民はトルクメンに連れ去られた捕虜に対する身代金を支払おうとはしなかった（Saray 1982: 401）。

19世紀のガージャール朝の宮廷の領土主張は、イランの諸王朝の伝統的な領域認識を反映して、実際にその統治が及ぶ範囲を越えていた。コーカサス方面では1828年ロシアとのトルコマンチャーイ条約によって境界が画定した。しかし、西方のオスマン帝国との国境は、英露両国が干渉したものの、画定には1847年から1913年までの半世紀以上を要した（守川 2007: 82-88）。歴史的ホラーサーンに対する領土主張は19世紀後半になっても続けられた。すでにアフガニスタンに統合されていたバルフを除くと、ヘラートはイギリスの干渉のもと1857年のパリ条約で領土主張が放棄され、メルヴはロシアの中央アジア南部の軍事征服の過程で、1884年に最終的にロシア領となった（木村 2008: 58-59）。この過程で、ガージャール朝はしばしば歴史的ホラーサーンの「失地回復」を目指す軍事遠征を行ったが、失敗に終わった。たとえば、1854年コングラト朝に抵抗していたメルヴのトルクメンを率いるアブドゥッラフマーン・ハリーフア²⁷に対して送った援軍の敗北、1858年に3万人もの捕虜を出したとされるメルヴのトルクメンに対する軍事的敗北はその実例であった。以上のようにガージャール朝は、その王朝成立過程において、統治体制の中にトルクメンを取りこむことに失敗し、遠征行に対する苛烈な懲罰遠征は彼らのさらなる反発を生んだ。そして北東国境において、宮廷の領域認識と実際の国境周辺地域における統治のずれを埋めるべく行われた軍事遠征は失敗した。

このように、ガージャール朝に比してコングラト朝のほうが、ハン自ら行うホラーサーン遠征に遠征行を組みこみ、アトルク地の分与、免税や灌漑作業の賦役の免除といった特権と引き換えに軍役を課す制度を整えるなど、トルクメンを統制する手段を有していた。しかしコングラト朝はメルヴを除くと、コペト山脈一帯でトルクメンに対する支配の拠点はなく、定期的なハンないしハン一族やメフタルといった高官による軍事遠征を通じた統制に限られた。さらに捕虜の売買は、各地に点在する隊商宿、草原で広範囲に行われ、転売も珍しくなかった。それゆえ、コングラト朝、ガージャール朝はともに、トルクメンの遠征行とそれに対する懲罰遠征で発生した捕虜の取引を止める手段を持たなかった。つまり、両者の宮廷間の交渉のみで捕虜問題を解決することはできなかった。

26 Ismā'il Khān 1991: 99-102。1836年6月、ガージャール朝軍はゴルガーンのカッル・カラ Qārī qal'a に拠るトルクメン・ギョクレン族のもとに兵5000人を派遣した。このとき同軍の司令官は、その城 qal'a をトルクメンに対する防衛拠点にすべきという進言を容れず、城を破壊し、貯えられていた糧秣をアトレク川に流したという（Muhammad Taqī Lisān al-muluk 1999: 659-660）。ムハンマド・アリー・ハーンはヒヴァに向かう途中、マシュハドとメルヴの間で、「天にまします故ナーイブッサルタナ [アッパース・ミールザ] が砲撃し、破壊してしまった」土地に住むトルクメンの一団と出会っている（Muhammad 'Alī Khān 1994: 5-6）。

27 1843年から1854年までの、アブドゥッラフマーン・ハリーフア率いるメルヴのトルクメン諸部族のコングラト朝支配に対する抵抗については、Wood（1998: 184-252）を参照。

IV. イギリスとムハンマド・アリー・ハーン使節団

第3章で述べてきたように、コングラト朝、ガージャール朝双方の宮廷は、1842年のムハンマド・アリー・ハーン使節団の交渉によって、シリア派捕虜解放問題を解決することはできなかった。それでは英露両国の代表が、ムハンマド・アリー・ハーン使節団の交渉に加わった理由は何であったのか。

1. 奴隷貿易廃止の理念

ムハンマド・アリー・ハーン使節団の派遣に先立つ1841年12月20日、ナポレオン戦争後のヨーロッパにおけるウィーン体制を支える五大国（イギリス、オーストリア、ロシア、プロシヤ、フランス）は、奴隷貿易廃止条約に調印した。この条約は、イギリス流の自由主義、道徳主義を体現したパーマストン外相（在任1835-1841年など）の外交努力の結果であったと評価されている（君塚2006: 41-42）²⁸。一方で、イギリスとプー＝サイド朝などインド洋西海岸部の諸政権・勢力との条約に盛り込まれた奴隷貿易廃止の諸条項は、奴隷輸送船と疑われる船舶に対するイギリス海軍による臨検の権限を認めており、結果としてイギリスの海上における影響力拡大や内政干渉に道を開くものであった（Suzuki 2017: 191-194）。

ムハンマド・アリー・ハーン使節団の派遣に際しても、イギリス側はシリア派捕虜解放要求と捕虜の取引禁止を、奴隷貿易廃止の理念と結びつけて解釈した。すでに1841年、パーマストンはマクニールに対して、イランにおける奴隷制と奴隷貿易の廃止に向けた情報収集を指示していた（Mirzai 2017: 135）。第2章冒頭で述べた1842年1月8日の会談の中でマクニールは、イギリス政府が「世界中すべての地域で奴隷制を廃止すること to abolish slavery in all parts of the globe を目指している」と述べ、後述するシェークスピアのロシア人捕虜解放の例を引きながら、ムハンマド・アリー・ハーン使節団の交渉成功を確信していると断言した（L/PS/9/121, pp. 46-47, Memorandum, 8 January 1842）。またマクニールがアッラークリ・ハンに宛てた書簡（英訳）の冒頭では、イギリス政府は「あらゆる捕虜、奴隷たち all captives and slaves を解放するために最も粘り強い努力」をしてきたと述べられている（L/PS/9/121, p. 129, McNeill to Allah Quli Khan, January 1842）。そして具体的にイギリス側は、ガージャール朝が求める捕虜解放を実現し、コングラト朝＝ガージャール朝間の相互協定 mutual agreement を成立させ、その協定を英露両国が保証するというシナリオを描いていた（FO 60/89, No. 24, Enclosure 3, Thomson to McNeill, 30 April 1842）。マクニールはトムソンに対する訓令の中で、ヒヴァに滞在中のロシア使節団と協力し、あくまでガージャール朝とコングラ

28 イギリスでは、18世紀後半以降、奴隷貿易禁止を訴える組織的活動が活発化し、1807年にイギリス船による奴隷貿易が正式に禁止され、1833年には、帝国内での奴隷制廃止が宣言された。ナポレオン戦争後のヨーロッパ諸国間の国際会議でも、イギリスは奴隷貿易廃止を議題として取り上げ、1841年の五大国による奴隷貿易廃止条約の調印につながった（君塚2006: 24-25, 39-42）。

ト朝の間の交渉の仲介者としてふるまいながら、「ペルシア人捕虜解放と[コングラト朝、ガージャール朝]双方の略奪遠征を終わらせる release of the Persian captives, and the putting an end to the plundering incursions on both sides」よう指示をしている（L/PS/9/121, pp. 69-70, Instruction to Thomson, 24 January 1842）²⁹。イギリス代表は、奴隷貿易廃止の文脈で、ガージャール朝とコングラト朝の間のシリア派捕虜解放交渉の仲介者として振舞おうとした。これは Mirzai (2017: 135-147) が述べる1846年のイギリス政府によるイランでの奴隷貿易禁止要求と、それに応じた1848年6月のムハンマド・シャーによるイラン諸港での奴隷貿易禁止令の発布に先立つものであった。

2. シェークスピアによるロシア人捕虜解放交渉の踏襲

イギリス側は、1840年のシェークスピアによるロシア人捕虜解放の成功を先例として、シリア派捕虜解放も可能と考えていた。その背景は以下の通りである。ロシア政府はヒヴァにいたロシア人捕虜の解放を要求し、1836年帝国南部国境一帯のヒヴァ商人を拘留した。オレンブルグ総督のペロフスキー（在任1832-1842, 1851-1857年）はさらなる強硬手段に訴え、1839年11月から1840年6月にかけてヒヴァへの軍事遠征を行ったが、冬の悪天候に阻まれ失敗に終わった。この遠征の期間中、駐カールス・イギリス政治代表のマクナーテン W. H. Macnaghten は、ヒヴァのロシア人捕虜解放をめぐる交渉を仲介することで、その遠征の口実を失わせようとした。彼はヘラートから、1839年12月24日にアボット、1840年5月11日にはシェークスピアを相次いでヒヴァに派遣した。シェークスピアの交渉は成功し、1256年ジュマダーII月4日/1840年8月3日アッラークリ・ハンは、自身の使者アタジャーシ・アーホンドに、シェークスピアと解放したロシア人捕虜416人を同行させロシアに派遣した（Muhammad Rizā Mīrāb: 733b-734a, 735a-736a; Browne 1921: 123-124）。1840年10月1日、シェークスピアたちはオレンブルグに到着した。これを受けてペロフスキーは、1840年9月26日（ユリウス暦）付969号のネッセリローデ外相宛書簡で、ロシア帝国領内に拘留されているヒヴァ商人を解放すべきであると説いた（Serebrennikov 1912-1914: II, 209-211）。この結果、640人にのぼるヒヴァ商人は解放された（Browne 1921: 124）。コングラト朝の年代記は彼らが、1256年ラマザン月20日/1840年11月15日ヒヴァに到着したと伝えている（Muhammad Rizā Mīrāb: 736a）。そして第2章の1842年4月25日夜の会談に関するところで述べたように、トムソンはシェークスピアの仲介によるロシア人捕虜解放の先例にならい、ガージャール朝に対しても捕虜を解放するよう要請した。しかしコングラト朝側は、ロシア人捕虜の解放は、拘束されていたヒヴァ商人との捕虜交換であったとし、ガージャール朝に対する捕虜の解放には応じなかった。

3. イギリスのアフガニスタン占領政策との関係

イギリスのムハンマド・アリー・ハーン使節団への参加は、当時の英印軍のアフガニスタン占領

29 ここでのロシア使節団とは、第5章で後述するニキフォロフを代表とする使節団を指す。

政策とも結びついていた。具体的にイギリス側は、ムハンマド・シャーのヒヴァ遠征計画の矛先がヘラートに転じること、およびコングラト朝がヘラートの問題に介入することを避けるため、コングラト朝とガージャール朝との間の相互協定成立を目指した。ムハンマド・シャーのヘラート包囲後の1838年12月10日、英印政庁はアフガニスタンに派兵し、第一次イギリス＝アフガン戦争が始まった。英印軍は、1839年8月7日カーブルを占領し、シャー・シュジャー（在位1803-1809, 1839-1842年）をアミールに復位させた。しかしシャー・シュジャーの統治に対する現地有力者たちの反発は強く、1842年4月5日彼はカーブル近郊で殺害された。そして英印軍は同年10月12日にカーブルからの撤退を余儀なくされた（小牧2006: 85）。この間の1257年シャツワール月6日/1841年11月21日から1258年サファル月28日/1842年4月10日にかけて、アッラークリ・ハンの息子ラヒームクリ・トラは、ホラーサーン遠征を行い、メルヴからヘラート方面に向かい、ムルガブ上流域からジャムシード族約7000戸をホラズムへと移住させた（塩谷2014: 75）。すでに1841年12月、マクニールはアバディーン外相（在任1841-1846年ほか）に対して、ムハンマド・シャーのヒヴァ遠征の矛先が、ヒヴァではなく再度ヘラートに向かう可能性があるかと警告している（FO 248/102, No 50, McNeill to Aberdeen, Tehran, 31 December 1841）。またトムソンはアッラークリ・ハンへの書簡の中で以下のように述べている。ヘラート政権がジャムシード族を移住させたことに対する報復を考えるのは当然である。ヘラート政権の弱体化を招くようなこうした移住は、ヘラート政権がガージャール朝に抗しえなかと考えてガージャール朝を頼り、ともにヒヴァに対する同盟を結ぶことへとつながりかねないだろう、と（FO 60/89, No 24, Enclosures 12 and 15, Thomson to [Allāh Qulī] Khān Ḥazrat, Khiva, No Dates）。このように英印軍のアフガニスタン占領政策が破綻しつつある状況下で、イギリス側はガージャール朝のヘラートへの再征、およびコングラト朝のホラーサーン遠征に対抗するために締結される可能性のあったガージャール朝とヘラート政権との同盟を阻止しようとした。

このようにイギリス側は、ヨーロッパ外交で自国が主導していた奴隷貿易廃止の理念をあてはめつつ、また1840年のシェークスピアによるロシア人捕虜解放の先例にならないながら、コングラト朝とガージャール朝との間のシーア派捕虜解放問題を解決しようとした。その際にイギリス代表は、あくまで自身をコングラト朝とガージャール朝間の交渉の仲介者と位置づけ、自国の利益を表立って主張することはなかった。しかしこの仲介外交自体は、当時行き詰まりを見せていたアフガニスタン占領政策を複雑化させかねないムハンマド・シャーのヒヴァ遠征計画を断念させ、コングラト朝とガージャール朝との同盟関係を成立させるという、中央アジアおよびその周辺地域での自国の利益追求にもとづいた構想だった。

V. ロシアとムハンマド・アリー・ハーン使節団

1. イギリスとの協調と競争の間で

一方で、なぜロシアはムハンマド・アリー・ハーン使節団の交渉に協力したのか。当時ヨーロッ

パにおいて英露両国は、ウィーン体制を支える五大国を担っていた。近年の研究においては、ニコライ一世（在位1825-1855年）の外交政策が、ヨーロッパにおける勢力均衡に加え、ヨーロッパ協調を軸としていたことが指摘されている（矢口2017: 64）。またIngle（1976: 147-156）は、1839-1841年のオスマン朝とエジプトの開戦、西欧列強の介入、ロンドン条約締結へと至る過程で、ネッセリローデ外相がヨーロッパにおける英露協調を推進し、アジアにおいても英露両国の勢力圏を確定し、その緩衝地帯において自由貿易を推進する政策を追求するようになったと指摘している。そしてロシアは、イギリスが主導した五大国間の奴隷貿易廃止条約の締結国の一つであった。このように、ムハンマド・アリー・ハーン使節団の派遣前後のロシアの対英外交の基軸は協調にあった。

一方、先に述べた第一次イギリス＝アフガン戦争の開始、ペロフスキーのヒヴァ遠征失敗、英印軍将校シェークスピアによるヒヴァのロシア人捕虜解放の成功により、ロシア帝国政府内ではイギリスの中央アジアにおける影響力拡大を懸念する声が高まっていた。モリソンの研究によれば、ネッセリローデやペロフスキーは、ロシア軍のヒヴァ遠征で成し遂げられなかった捕虜解放を、シェークスピアが単独で成功させたと考え、衝撃を受けた。また政府内では、イギリスの影響力がアフガニスタンからブハラやカスピ海に拡大する可能性を懸念する声が高まっていた（Morrison 2013: 45-46）。また当時アジア市場への綿織物を中心とした工業製品輸出をめぐる英露間の競争が始まっていた。イギリスは自由貿易主義を掲げ、1838年にオスマン帝国、1841年にガージャール朝と相次いで通商条約を締結し、綿織物輸出を拡大させた。一方でロシアは、第二次ロシア＝イラン戦争（1826-1828年）での戦勝によるガージャール朝とのトルコマンチャーイ条約（1828年）、およびオスマン帝国とのヒュンキヤル・イスケレスイ条約（1833年）により、ラシヤと綿織物を主力とするロシア工業製品を、イギリスよりも低関税でイラン市場、トルコ市場に輸出できる権利を得ていた。それにもかかわらずロシア産織物は、イギリス製品との競争に敗れ、1840年代に入るまでにそれらの市場での販路を失っていった（Kudriavtseva 2010: 84-93; Rozhkova 1949: 184; 塩谷2017: 39-40）。

ヨーロッパにおける対英協調を維持する一方、中央アジアにおけるイギリスの軍事上、通商上の影響力拡大を懸念したロシア政府は、1841年5月から12月にかけてニキフォロフ、1842年8月から翌1843年2月にかけてダニレフスキー G. Danilevskii をヒヴァに派遣し、①ヒヴァ領内でのロシア帝国臣民の人身・財産の保護および捕虜取引の停止、②両国間のカザフ草原における国境画定、③両国間貿易における関税引き下げ（商品価格の5%以下に設定）を交渉させた。さらに、ヒヴァへのロシア代表の常駐を認めさせることも交渉項目に含まれていた（Serebrennikov 1912-1914: III, 10-44; IV, 31-42）。ニキフォロフはその初代常駐代表に任命されたが、ヒヴァでの交渉に失敗し、ムハンマド・アリー・ハーン使節団の派遣決定前の1841年10月27日（ユリウス暦）に、同地の退去を余儀なくされた³⁰。その後組織されたダニレフスキー使節団は、1842年10月17日ヒヴァに

30 Zhukovskii 1915: 128. このことは、ムハンマド・アリー・ハーン使節団のテヘラン出発の時点でも、イギリス側に伝わっていなかった。

1842年ガージャール朝使節団のヒヴァ派遣 (塩谷)

到着し、新たに即位したラヒームクリ・ハンとの間で、同年12月27日(ユリウス暦)付で、訓令内容にほぼ沿った条約 *obiazatel'nyi akt* の署名交換に成功した³¹。

2. ロシア政府のムハンマド・アリー・ハーン使節団に対する姿勢

ムハンマド・アリー・ハーン使節団の派遣は、ロシア政府が1841-1843年の間に派遣した2つの使節団の交渉の合間に行なわれた。そのためロシア政府は、一方でヨーロッパにおける英露の協調を損なう行動を慎みながら、同時にロシアとヒヴァの二国間関係へのイギリスの介入を阻止しようとした。駐テヘラン・ロシア公使メデムは、アッラークリ・ハンに宛てた書簡の中で、英露両国の助言を受け入れて捕虜を解放すべきであり、さもなければガージャール朝のみならず両国との対立も不可避だと述べている(L/PS/9/121, pp. 121-125, *Medem to Allah Quli Khan, French Translation, January 1842*)。またネッセリロードがダニレフスキーに宛てた訓令においても、ヒヴァでムハンマド・アリー・ハーン、トムソンに会うことがあれば、その交渉に協力するよう指示が出されている(*Serebrennikov 1912-1914: IV, 42*)。ここにはロシアのムハンマド・アリー・ハーン使節団への協力姿勢ならびに英国との協調姿勢が見られる。しかし、すでにロシア人捕虜と帝国領内に抑留したヒヴァ商人との捕虜交換を終えていたロシア政府にとって、シーア派捕虜解放は最重要の問題ではなかった。またイギリスが主導する奴隷貿易廃止の理念が、ロシア側の交渉姿勢を規定していた形跡も、管見の限り確認できない。そしてムハンマド・アリー・ハーン使節団のヒヴァ滞在中にネッセリロードがダニレフスキーに与えた訓令で強調されていたのは、ニキフォロフが進めた条約締結交渉を完遂すること、とくに国境の確立よりも関税引き下げを優先して交渉すること、そしてロシア=ヒヴァ間の交渉にイギリス側代表が介入することを絶対に回避することだった(*Serebrennikov 1912-1914: IV, 31-42*)。ロシアはあくまで、ガージャール朝、イギリスが主導するムハンマド・アリー・ハーン使節団の交渉に協力姿勢を示しつつも、あくまで自国の使節団が進めるヒヴァとの通商条約締結交渉を優先した。

おわりに

ホラズムのコングラト朝は1810年代から1820年代にかけて、18世紀中葉までにトルクメン諸部族が定着していたコペト・ダグ北麓一帯に進出し、イランのガージャール朝は1830年代初頭までにホラーサーンの統治を確立した。こうしてコングラト朝とガージャール朝は、コペト・ダグ一帯でそれぞれの主張する領域が接することになり、トルクメンが遠征行を通じて捕虜とし、ブハラ、ヒヴァに奴隷として売り渡していたシーア派定住民の解放をめぐる交渉を繰り返すようになった。

1842年のムハンマド・アリー・ハーン使節団は、そうした捕虜解放をめぐる交渉の一つであっ

31 *Serebrennikov 1912-1914: IV, 141-142*。これらの使節の交渉に関するロシア側の解釈は、*Zhukovskii (1915: 122-141)* を参照。

たが、英露両国が代表を同行させた点で、他の交渉とは異なっていた。本論は、コングラト朝とガージャール朝の関係史の文脈から、ムハンマド・アリー・ハーン使節団の交渉が失敗した理由を検討し、また英露両国がなぜ本使節団の交渉に加わったのかを明らかにしてきた。

まずコングラト朝とガージャール朝の関係史の文脈に、ムハンマド・アリー・ハーン使節団の交渉を位置づけた。ガージャール朝側は無条件のシーア派捕虜解放と、捕虜の売買禁止をコングラト朝側に求めた。これに対しコングラト朝側は、あくまで捕虜交換ないし捕虜の買戻しを主張した。しかし、両者の宮廷間で繰り返された交渉のみで、捕虜解放問題を解決することは困難であった。たしかにガージャール朝に比してコングラト朝のほうが、ハン自ら行うホラーサーン遠征に遠征行を組みこみ、移住者には土地の分与、免税や灌漑作業の賦役の免除といった特権を与えることと引き換えに軍役に課税制度を整えるなど、トルクメンを統制する手段を有していた。しかしコングラト朝はメルヴを除くと、コペト・ダグ一帯でトルクメンに対する支配の拠点を持っていなかった。また捕虜は隊商宿や草原など都市以外の場所でも広く取引され、転売もされていた。こうして、コングラト朝、ガージャール朝はともに、相互の捕虜の発生およびその売買を止める手段を持ちえなかった。

次に本論は、英露両国の代表がムハンマド・アリー・ハーン使節団に加わった意図について考察した。これまでグレートゲームの文脈での研究では、対中央アジア政策をめぐる英露の対立を強調する研究と、1840年代の英露それぞれの協調の模索を評価する研究がある。*Khalfin (1974)*、*Niazmatov (2010)* に代表される前者は、ロシアと中央アジアとの歴史的な結びつき、ペロフスキーのヒヴァ遠征による両者間の一時的緊張、その背景にあったイギリスの策謀の存在を強調する。一方で *Ingle (1976)*、*Yapp (1980)* に代表される後者は、イギリス側は英領インド総督たち、ロシア側はネッセリロード外相それぞれが、相互の協調関係を模索していた点を評価している。しかしこれらの研究は、英露いずれかの外交政策の分析にもとづいているものの、双方の政策を比較検討するには至っていない。*Morrison (2013)* はこうした二分された見解を乗り越え、英露の対中央アジア政策における「列強」としての威信へのこだわり、個人的野心、ヨーロッパのアジアに対する偏見、文明化の使命、現地民の声に対する無知といった共通要素を一次史料にもとづき明らかにした。しかし同時に、英露の通商面での競争や、本論におけるコングラト朝とガージャール朝との関係のような現地政権間との関係との関わりを視野に入れていない。本論での英露両国代表のムハンマド・アリー・ハーン使節団への参加の背景の分析から、両国の対中央アジア政策の比較に、以下のような新たな知見を加えることができよう。イギリスは、コングラト朝、ガージャール朝双方の宮廷がトルクメンに対してなした統制の限界に関わりなく、両者間の捕虜解放交渉を、当時本国政府が推進していた奴隷貿易廃止の文脈に置きながら仲介しようとした。それと同時にイギリスは、自国のアフガニスタン占領政策を脅かすガージャール朝のヘラート再征と、コングラト朝のホラーサーン遠征の双方を阻止しようとした。ここには、奴隷貿易廃止という当時イギリスがヨーロッパで列強との交渉の際に掲げていた理念、および大西洋、アジア、アフリカ海域における政策を適用しつつ、中央アジアおよびその周辺地域での自国の利益追求を正当化しようとする仲介外交の手法が見

られる。これに対してロシアは、ヨーロッパにおける対英協調を維持し、かつ中央アジアにおいてはイギリスの軍事上、通商上の影響力拡大に対抗するという二重の目標を、前者はムハンマド・アリー・ハーン使節団への協力表明、後者は同使節団とは独立して派遣していた2つの使節団による通商条約締結によって実現しようとしたが、実際には後者を優先させた。こうしたロシア政府の交渉姿勢は、塩谷（2017）で論じたように、ヨーロッパにおける対英協調を損なわず、同時にイギリスの自由貿易主義に対抗しようとして、1851年に清朝との間で締結した伊犁通商条約のときの交渉姿勢と共通していた。

*本論は研究課題「近代ロシア帝国の開発と中央アジア南部定住地域の社会変容—灌溉史の視点から—」（平成26年度科学研究費補助金、若手研究(B)、課題番号:26870083)の研究成果の一部である。また史資料収集に関しては、「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）による支援を受けた。ここに記して謝意を表したい。

参考文献

略号

AV IRRAN: Arkhiv vostokovedov, Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi Akademii nauk, Saint Petersburg.

一次史料

(未公刊)

Muhammad Rizā Mirāb Āgahī, *Riyāz al-dawla*, İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi, Türkçe Yazmalar, N. 82, ff. 524b–758a.

National Archives (Kew)

FO60: Foreign Office: Political and Other Departments: General Correspondence before 1906, Persia.

FO248: Foreign Office and Foreign and Commonwealth Office: Embassy and Consulates: General Correspondence, Iran (formerly Persia).

The British Library (London)

L/PS/3: India Office Records: Home Correspondence, 1807–1911.

L/PS/9: India Office Records: Records of the India Office Political and Secret Department: Correspondence on Areas outside India, 1781–1911.

(公刊)

Fraser, J. B., (1825) *Narrative of a Journey into Khorasan, in the Years 1821 and 1822. Including Some Account of the Countries to the North-east of Persia: With Remarks upon the National Character,*

Government, and Resources of that Kingdom, London: Longman, Hurst, Rees, Orme, Brown, and Green.

Ismā'īl Khān Mīr-Panja (1991) *Khāṭirāt-i asārat: Rūznāma-yi safar-i Khvārazm va Khīva*, Ş. Tabrā'iyān (ed.), Tīhrān: Mu'assasa-yi Pazhūhish va Muṭāla'āt-i Farhangī.

I'timād al-salṭana (1984–1985) *Tārīkh-i muntazam-i Nāshirī*, 3 vols., edited by Muḥammad Ismā'īl Rizvānī, Tīhrān: Duniyā-yi Kitāb.

Muḥammad 'Alī Khān Ghafūr (1994) *Rūznāma-yi Safar-i Khvārazm*, Muḥammad Ḥasan Kā'ūsī 'Arāqī and Muḥammad Naṣīrī Muqaddam (eds.), Tīhrān: Mu'assasah-i Chāp va Intishārāt-i Vizārat-i Umūr-i Khārija.

Muḥammad Taqī Lisān al-muluk Sīpīhr (1999) *Nāsikh al-tavārīkh: Tārīkh-i Qājārīya*, J. Kiyānfar (ed.), 4 vols., Tīhrān: Asāfir.

Rizā Qulī Khān Hidāyat (1975) *Sifārat Nāma-yi Khvārazm: Relation de l'ambassade au Kharezm de Riza Quoly Khan, 1800–1871*, Ch. Schefer (ed. et tr.), Amsterdam: Philo Press.

————— (2002) *Tārīkh-i Rawzat al-ṣafā-yi Nāshirī*, J. Kiyānfar (ed.), 10 vols, Tīhrān: Asāfir.

Serebrennikov, A. T. (ed.) (1912–1914) *Sbornik materialov dlia istorii zavoevaniia Turkestanskogo kraia*, Vols. II–IV, Tashkent: Tipografiia shtaba Turkestanskogo voen. okruga.

Vámbery, A. (1868) *Sketches of Central Asia: Additional Chapters on My Travels, Adventures, and on the Ethnology of Central Asia*, London: W. H. Allen.

二次文献

宇山智彦 (2016) 「周縁から帝国への「招待」・抵抗・適応—中央アジアの場合—」宇山智彦編『ユーラシア近代帝国と現代世界』（シリーズ・ユーラシア地域大国論4）：121–144, ミネルヴァ書房.

君塚直隆 (2006) 「自由主義外交の黄金期—パーマストンと奴隷貿易—」田所昌幸編『ロイヤル・ネイヴィーとパクス・ブリタニカ』：23–46, 有斐閣.

木村暁 (2008) 「中央アジアとイラン—史料に見る地域認識—」宇山智彦編『地域認識論—他民族空間の構造と表象—』（講座スラブ・ユーラシア学2）：39–72, 講談社.

————— (2016) 「マンギト朝政権の対シエラ派聖戦とメルヴ住民の強制移住」守川知子編『移動と交流の近世アジア史』：59–85, 北海道大学出版会.

小前亮 (2001) 「コングラト朝ムハンマド・ラヒーム・ハーンの政権について—*Firdaws al-iqbāl* による考察—」『内陸アジア史研究』16: 39–59.

小牧昌平 (1992) 「19世紀初期のホラーサーン—初期のカージャーール朝についての一試論—」『上智アジア学』10: 17–42.

————— (2006) 「ヘラートのヤール・モハンマド・ハーン—19世紀中期のイラン・アフガニスタン関係史—」『東洋史研究』65(1): 81–103.

- 塩谷哲史 (2014) 『中央アジア灌漑史序説—ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡—』 風響社。
- (2017) 「伊犁通商条約 (1851 年) の締結過程から見たロシア帝国の対清外交」『内陸アジア史研究』 32: 23–46.
- 守川知子 (2001) 「ガーニャール朝期旅行記史料研究序説」『西南アジア研究』 55: 44–68.
- (2007) 「近代西アジアにおける国境の成立—イラン=オスマン国境を中心に—」『史林』 90(1): 62–91.
- 矢口啓朗 (2017) 「ヨーロッパ協調とニコライ一世の外交政策—ベルギー独立問題への対応から—」『東北アジア研究』 21: 45–70.
- Allaeva, N. (2014) “XIX asr Xiva xonligida elchilik xizmati: Eron elchisining safar tafsilotlari,” *O‘zbekiston tarixi*, 2014(2): 31–43.
- Amanat, A. (1990) “Central Asia: Relations with Persia in the 13TH/19TH Century,” *Encyclopaedia Iranica*, V(2): 205–207.
- Bartol’d, V. V. (1927) *Istoriia kul’turnoi zhizni Turkestana*, Leningrad: Izdatel’stvo Akademii nauk SSSR.
- Botiakov, Iu. M. (2002) *Alamany: Sotsial’no-ekonomicheskie aspekty instituta nabega u Turkmen (seredina XIX–pervaia polovina XX veka)*, Saint Petersburg: Muzei antropologii i etnografii RAN.
- Bregel’, Iu. (1961) *Khorezmskie turkmeny*, Moscow: Izdatel’stvo vostochnoi literatury.
- (1966) “Arkhiv khivinskikh khanov (predvaritel’nyi obzor novykh dokumentov),” *Narody Azii i Afriki*, 1966(1): 67–76.
- Browne, E. G. (1921) “How Sir Richmond Shakespear set free the Russian Slaves at Khiva,” *Journal of the Central Asian Society*, 8: 121–124.
- Eden, J. (2017) “Beyond the Bazaars: Geographies of the Slave Trade in Central Asia,” *Modern Asian Studies*, 51(4): 1–37.
- Granmayeh, A. (1996) ““Sefarat Name-ye Khwarazm”: The Last Iranian Mission to Central Asia in the 19th Century,” *Central Asian Survey*, 15(2): 233–255.
- Ingle, H. N. (1976) *Nesselrode and the Russian Rapprochement with Britain, 1836–1844*, Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Khalfin, N. A. (1974) *Rossii i khanstva Srednei Azii: perviaia polovina XIX veka*, Moscow: Nauka.
- Kudriavtseva, E. P. (2010) *Russkie na Bosfore: Rossiiskoe posol’stvo v Konstantinopole v pervoi polovine XIX veka*, Moscow: Nauka.
- Mannanov, B. S. (1963) “Otnosheniia Irana so sredneaziatskimi khanstvami vo vtoroi polovine XIX v.,” *Kratkie soobshcheniia Instituta narodov Azii AN SSSR*, 39: 56–71.
- Mannonov, B. S. (1997) “Loloboshining Xorazm safari,” *Sharqshunoslik*, 8: 73–80.
- Mirzai, B. A. (2017) *A History of Slavery and Emancipation in Iran, 1800–1929*, Austin: University of Texas Press.
- Morrison, A. (2013) “Twin Imperial Disasters: The Invasions of Khiva and Afghanistan in the Russian and

- British Official Mind, 1839–1842,” *Modern Asian Studies*, 48(1): 1–48.
- Niiazmatov, M. (2010) *Poisk konsensusa: Rossiisko-khivinskii geopoliticheskie otnosheniia v XVI–nachale XX v.*, Saint Petersburg: Peterburgskoe Vostokovedenie.
- Noelle-Karimi, Ch. (2012) ““Different in All Respects”: Bukhara and Khiva as Viewed by Qājār Envoys,” Y. Köse (ed.), *Şehrâyîn: Die Welt der Osmanen, die Osmanen in der Welt Wahrnehmungen, Begegnungen und Abgrenzungen*, 435–446, Wiesbaden: Harrassowitz.
- Rosliakov, A. A. (1955) “Alamany,” *Sovetskaia etnografiia*, 1955(2): 41–53.
- Rozhkova, M. K. (1949) *Ekonomicheskaiia politika tsarskogo pravitel’stva na Srednem Vostoke vo vtoroi chetverti XIX veka i russkaia burzhuziia*, Moscow: Izdatel’stvo Akademii nauk SSSR.
- Saray, M. (1982) “The Alamans or Raiding Parties of the Turkmens,” *Asian and African Studies*, 16: 399–402.
- Schneider, I. (2003) “Allies or Enemies?: The Military Relations between the Yamūt Turkmens and the Nascent Qājār State in Late 18th and Early 19th Century Iran,” I. Schneider (ed.), *Militär und Staatlichkeit*, 171–199, Halle/Saale: OWZ.
- Suzuki, H. (2017) *Slave Trade Profiteers in the Western Indian Ocean: Suppression and Resistance in the Nineteenth Century*, Cham: Palgrave Macmillan.
- Urunbaev, A et al. (eds.) (2001) *Katalog khivinskikh kaziiskikh dokumentov XIX–nachala XX vv.*, Tashkent, Kioto: Institut vostokovedeniia im. Abu Raikhana Berunii Akademii nauk Respubliki Uzbekistan, Kiotskii Universitet po izucheniiu zarubezhnykh stran.
- Wood, W. A. (1998) “The Sariq Turkmens of Merv and the Khanate of Khiva in the Early Nineteenth Century,” Ph.D. Dissertation, Indiana University.
- Yapp, M. E. (1980) *Strategies of British India: Britain, Iran and Afghanistan, 1798–1850*, Oxford: Oxford University Press.
- Zargarīnezhd, Gh. and N. ‘Alipūr (2009) “Torkaman-hā va bardegī-ye Irānīyān dar ‘aṣr-e Qājār (az āghāz tā en‘eqād-e ‘ahdnāme-ye Ākhāl),” *Tārīkh-e Eslām va Irān (History of Islam and Iran)*, 77: 23–45.
- Zhukovskii, S. V. (1915) *Snosheniia Rossii s Bukharoi i Khivoi za poslednee trekhletie*, Petrograd.

(しおや あきふみ, 筑波大学人文社会系)